

特集

専大を使いつくせ! キャリアを磨く大学生活



人間科学部
社会学科3年
小林万桜

3年次から家族の研究を中心とする永野ゼミに所属。アルバイトはファミレス店員。趣味はアイドルのライブ鑑賞。

アステラス製薬・明治安田生命保険チームとして、医療や健康について学生や子供に向けて発信することに取り組んだ。

経営学部
ビジネスデザイン学科3年
根本涼太郎

障害児の余暇活動を支援するボランティアサークル樹々の会で活動。学習塾でアルバイト。趣味は旅行、カラオケなど。

KIBIチームとして、機微力育成のプログラムを国内外の企業に提供する株式会社KIBIのコンセプトに合う情報発信を考案した。

商学部
マーケティング学科2年
窪 一埼

神田キャンパス周辺の美味しいお店を巡るサークルで活動。アルバイトはたい焼き屋の店員など。趣味はアニメや映画の鑑賞。

生田緑地共同事業体チームとして生田緑地で出る発生材を環境保護の観点から有効活用する活動に取り組んだ。

リコージャパン株式会社
エンタープライズ事業本部
多ヶ谷明花

H20経営卒。現在の職場ではDX推進の顧客提案を担当。趣味は旅行や美味しいものをみんなで食べること。

学生時代に池本ゼミのメンバーで、川崎市の納豆製造会社の商品開発に取り組んだ。

◎ 大学で何を学びたいか

——学生の皆さんは、どのような目的をもって大学に入学されましたか。

小林：高校時代、私はどんな仕事に就きたいかは明確にはわかっていませんでした。でも「人と関わること」が好きで、人と社会について幅広く学べる人間科学部社会学科を選びました。専大のこの学科は、学外に出て調査するフィールドワークが授業に組み込まれているという点

にもひかれました。1年次に生田緑地でフィールドワークを行いました。そこで私はベンチに焦点を当てて、形状や設置されている場所による利用の仕方の違いなどを、利用者に話を聞いたりして調査しました。3年次からはゼミが始まり、そこで本格的にフィールドワークを行うことになるのが楽しみです。

根本：私は大学を選ぶ際、専修大学入学案内にあった、「0から1を生み出す」という言葉にひかれてビジネスデザイン学科に入学しました。

専修大学には学生の目を開かせ、将来の可能性を広げるための仕掛けがたくさんあります。今年で開設20周年を迎えたキャリアデザインセンターの「問題解決型チャレンジプログラム」もその一つ。今回の特集では受講生に、プログラムで何に取り組み、何を学んだのかを語ってもらいました。さらには、同プログラムを立ち上げた池本正純名誉教授や、かつてこのプログラムを経験した社会人の先輩にもお話を伺いました。せっかく入ったのだから、我が子には大学を使いつくしてほしいものですね。



元キャリアデザインセンター長
専修大学名誉教授
池本正純

専門は経済学。2003年から2017年までキャリアデザインセンター長を務め、問題解決型チャレンジプログラムを立ち上げた。

学科では、企業の収益化のモデル、ヒット商品の生み出し方などの事例を学ぶ授業もあり、面白く感じています。サークルでは障害児の余暇活動をサポートする活動していますが、どうしたら参加者が集まるイベントになるかなどを考える際も、学んだ経営学の知識が活きていると思います。

窪：私は高校時代にSDGsに関する授業で、アフリカのカカオ生産における児童労働の問題やそれを解消するためのフェアトレードなどを知

問題解決型チャレンジプログラム

社会や企業・団体などが抱える問題に学生がチームで主体的に取り組み、問題の原因分析や解決策の提案を行う、学部学年に関係なく参加できるプログラム。5月にスタートし、まずは講義でチーム活動の心構えや問題解決のプロセスなどを学び、それから3～8人のチームで課題に取り組む。企業・団体など学外との折衝を重ね、チームで協力し合いながら課題解決に取り組んでいく内容。8カ月に及ぶ活動の成果は12月の成果発表会で発表することになる。



昨年12月7日の成果発表会。企業・団体や大学の関係者を前に、チームごとにプログラムの成果を発表した

り興味を持ち、物流やマーケティングを学びたいと思って商学部マーケティング学科に入学しました。将来どんな仕事をしたいかは決まっていなかったので、大学では様々な経験をして自分が本当にやりたいことを考えたいと思っています。問題解決型チャレンジプログラムの参加もその一つです。また、この春休みには新潟県のゲストハウスで暮らし、そこの手伝いをしながら、野山に出てイノシシをさばいて食べるなどの経験もしました。

問題解決型チャレンジプログラムで何をしたか

——問題解決型チャレンジプログラムに参加したきっかけを教えてください。

窪：入学ガイダンスでプログラムを知り、友達もできるだろうし、貴重な経験にもなると思って参加しました。

根本：私は1年次にキャリアデザインセンターのフューチャーデザインプログラム※（現ビジョンデザインプログラム）に参加して、それがよかったので、2年ではこのプログラムに参加しました。

小林：私は1年次には教職課程を履修していたのですが、迷いもあり、途中でやめました。その

※未来設計の思考法を身に付ける講座。

分の時間を将来への視野を広げることに使おうと思ひ、2年次にこのプログラムに参加しました。

——問題解決型チャレンジプログラムは、企業や団体の課題に3～8名のチームで取り組みます。それぞれどのようなことを行っただけでしょうか。

小林：日本の医療には海外で使われている薬が未承認であったり、承認が遅れたりして使用できないドラッグロス・ドラッグラグの問題があり、治療を諦めたり、高額な費用を払って海外で治療しなければならない人がいます。私たちのチームは、このことを社会、特に未来を担う子供に伝えるという課題に取り組みました。何をするか考えるところから始め、実現性、コスト、影響力なども検討したうえで企画を企業にプレゼンし、実際に子供たちに向けた授業を行いました。子供の興味を引くよう、健康について考えるカードゲームも作り、計6回、学童クラブで授業を行いました。子供たちの反応は良かったです。

根本：私たちのチームは、企業からの課題は何も与えられていませんでした。株式会社 KIBI 様が挨拶、感情、思いやり、多様性を大事にされている会社でしたので、それをどう形にするかを考え、イベントブースに多様な価値観を持つ人同士が交わるアクティビティスペースを作ることをご提案しました。来場者に取り組める優しさのタイプ分類テストや、優しさを疑似体験できるカードゲームも考案しました。その内容を企業にプレゼンしたところ、面白い発想だと評価いただきました。



↑小林さんのアステラス製薬・明治安田生命保険チーム。医療や健康についての授業では、ゲーム要素も取り入れ、子供たちに楽しく学んでもらった。

窪：私たちのチームは、生田緑地の管理上発生する倒木や折れ枝などの発生材の有効活用に取り組みました。生田緑地でイベントを2回行い、子供たちには木に触れる体験を、親御さんには生田緑地での発生材の問題を伝え、伐採のボランティアの活動についても紹介しました。発生材を材料に、木のパズルやブンブンゴマ、楽器などを作って子供たちに遊んでもらいました。2回目のイベントではクリスマスツリーの飾りつけなども盛り込み、子供たちに喜んでもらいました。結果的に100kgの発生材を活用しましたが、生田緑地全体で1年に出る場外処分する廃棄物100tのうちの0.1%に過ぎなかったことを後で知り、衝撃を受けました…。

◎ 困難とそこから得たこと

——プロジェクトを通してどのような困難がありましたか。そこから学んだことはありますか。

小林：チーム7人中4人は3年生で、就活でインターンシップにも参加したりしていたので、みんなの予定を合わせて活動するのが大変でした。最初はチームとして意思疎通がとれませんでした。ミーティングを重ねるごとに互いに理解が深まっていきました。子供に対する授業で、ゲームを取り入れるというのは私の提案ですが、賞状を作って子供に達成感を持ってもらうというのは他のメンバーの提案です。チームでは自分では思いつかないアイデアも出てきて、一人では達成できない成果を生み出せました。

根本：KIBI 様の実現したい世界は抽象度が高いので、そこからアイデアを出して具体的な形にしていくのは大変でした。私たちのチームはあえてリーダーを置かないことで、一人一人が主体的に



↑根本さんのKIBIチーム。株式会社KIBIの取り組みを社会に発信するためのプランを、企業内でプレゼンする様子。



活動するようにしました。キャンパスが閉まる夜11時まで大学に残り、みんなで議論したこともあり、それもいい思い出です。プレゼンなど人前で話すことも多く、そうした経験を重ねることで、人前で話すのが上手になったと思いますし、チーム全員で成長できたと感じています。

窪：生田緑地のイベントにおいては、子供たちを楽しませるということばかりに意識がいつてしまっていて、「森林資源を有効活用する」という本来の目的からフォーカスが逸れてしまったこともありました。その時は、再度みんなで話し合い、やるべきことを整理して解決しました。意見を出し合い、協力してチームで一つのことをやり遂げた経験は、社会でも役立つと思っています。

◎ チャレンジすることの大切さ

——卒業生の多ヶ谷さんも、学生時代に問題解決型チャレンジプログラム（当時は課題解決型インターンシップ）に参加されました。学生たちの話を聞いてどのようなことを感じましたか。

多ヶ谷：社会では受け身でなくて、自分から変

えていける力がないとやっていけません。私も職場では「ファーストペンギンにならさい」ということは言われています。皆さん、それを実践しているのが素晴らしいと思います。

私は学生時代にこのプログラムにゼミで参加して、川崎の納豆メーカーの課題に取り組み、納豆のたれを開発しました。納豆をどういう時に食べるか、朝食のイメージなどを学生からアンケートをとって考えました。企業に提案した味噌だれの納豆は、ご飯と納豆さえ食べれば、味噌汁のかわりにもなるという発想で作ったものです。実際に商品化されスーパーに並んだのを見たときは嬉しかったです。

学生時代のいろいろな経験は、社会で話のきっかけにもなるし、自信にもつながります。成功しようが失敗しようが、それは問題ではなくて、チャレンジしたことで得るものは絶対にあるので、学生にはどんどんチャレンジしてほしい。社会に出るとわかりますが、学生の4年間はすごく貴重です。

——問題解決型チャレンジプログラムを立ち上げた池本先生は、学生たちの話を聞いてどう思われましたか。

池本：このプログラムは、今年で20年目を迎えますが、参加した学生に学びを得た実感がないのだったら、ここまで続いてこなかったと思います。しんどいけど、学びが多かった。成長できた。このプログラムにチャレンジした学生には、そう感じてもらえているのだと思います。

誤解を恐れずに言えば、教員が講義をして知識を授けるという授業ばかりだと、学生がなかなか成長しないと思います。問題解決型チャレンジプログラムはキャリア教育でもあります。私は教育改革の切り口と思って取り組んでいま



↑窪さんの生田緑地共同事業体チーム。生田緑地のイベントにて、発生材から作ったブンブンゴマなどのおもちゃで子供に遊んでもらった。



した。受験勉強とは違って、正解が用意されていない課題に立ち向かうことで、学生は人間的に成長する。そして何より、チャレンジする意気込みがないと、その一歩は踏み出せません。

教員時代にもプログラムに参加した学生が成長する様子は見てきましたし、今日、学生たちの話を聞いてもそれを感じます。問題解決型チャレンジプログラムが私の退職後もこうして続いているというのは嬉しいことです。

◎ プロジェクトの経験を どう活かすか

——学生たちは、この経験を今後どのように活かしたいと思いますか。

小林：私は子供が好きで、将来の職業として教員も考えていましたが、一方で、自分に教えることができるのかという不安もありました。このプログラムで子供たちに授業をする経験をして、教えることにも自信を持て、将来の選択肢として教員を再度考えるようになりました。またこのプログラムを通して、生徒や学生の将来設計のサポートをするキャリアコンサルタントの仕事にも出会い、将来の仕事として興味を持っています。

根本：私たちのチームには、アイデアマンがいたり、方向性がずれそうなときに軌道修正してくれる人がいたり、まとめ役がいたりして、それぞれが強みを活かしてきました。そして、自分の強みにも気づくことができました。チームワークの大切さを実感したので、今後の大学生活でも、何かチームで挑戦することに取り組んでみたいと思います。

窪：チームの作業で、レスポンスの速さは大事だと感じ、それを心掛けてきました。それは、今後も活かしていきたいです。それと、生田緑地で開催したイベントでは、生田緑地整備事務所と話し合った結果、参加者から料金を徴収したのですが、お金をいただく以上、それに見合うものを提供しなければ納得してもらえないので、その厳しさも感じました。今回プログラムに参加して、環境への取り組み、ビジネスとリサイクル活動についても学べたので、今後そうしたことにも積極的に取り組んでいきたいです。

お知らせ

保護者も参加可能なビッグイベント

5月17日(土)

神田キャンパスで開催

専修キャリア・インターンシップフェア

学内最大のキャリア・就活イベント『専修キャリア・インターンシップフェア』が5月17日(土)に神田キャンパスで開催されます。「インターンシップの基本」や「業界研究セミナー」といった情報収集のための講座や、「エントリーシートの書き方」「面接のイロハ」など具体的な選考対策、OB・OGの講演や企業説明会まで、この日一日でまとめて体験できる充実の内容です(20種類以上のプログラムから、希望するものを選んで参加)。

就活本番を控えた3年次生はもちろん、早くから準備を進めておきたい1・2年次生にとっても参加必至のイベントです。一部のプログラムを除き、保護者も参加できます。ご子女と一緒に参加して、就活の『いま』を知るのにお役立てください。

なお、イベントの詳細は大学ホームページでご確認ください。